

科学知識の社会学（SSK）と「第三の波」

横山輝雄（南山大学）

社会構成主義ないし社会構築主義は、さまざまな領域でいわれてきた。科学哲学、科学論で社会構成主義として必ず登場するのが、「科学知識の社会学」（Sociology of Scientific Knowledge - SSK）である。ブルアの「ストロング・プログラム」などで知られるこの学派は、科学に関する一般的議論だけでなく、科学史や現代科学の具体的問題にそくした研究とともに、社会構成主義的な科学観を提示した。SSK にたいしては、それが科学を相対化するものであるとして、ラウダン（ローダン）らの合理主義の科学哲学者から、社会的要因の影響は確かに存在するが、基本的には「科学は合理的に進歩する」という批判を受けた。SSK が誕生してから 40 年近くがたち、これまでのものとその先行者の論文を収録した大きな論集が出されるなど、一種の「古典化」がおこり、歴史的なものになってしまったかの感もある。しかし、現在でも科学と社会についての書物や論文などの序論で引用されるなど、まだ「現役」であるかのような場面もある。SSK 以降の議論を検討することをとおして、現在の科学哲学にとって社会構成主義のもつ意義を検討したい。

SSK あるいは、社会構成主義一般の科学哲学にたいして「サイエンス・ウォーズ」でさまざまな非難がなされた。しかし、その内容は以前に合理主義の科学哲学者たちがいっていたもの以上ではないか、それ以下のものであった。「サイエンス・ウォーズ」は、この意味で理論的ではなく、まさに社会的要因として「外在的に」影響を与えた。合理主義の科学哲学者からの批判については、今回は詳しく検討しない。そうではなく、社会構成主義の科学論とみなされ、SSK と一括されたり、SSK の展開形態あるいは発展形態とみなされることもある、広義の社会構成主義ともいべきグループと SSK の関係を検討する。SSK を支持するにせよ反対するにせよ、それはそれ以前の論理実証主義やポパーの批判的合理主義、あるいはマートン派の科学社会学などの、科学を合理的営みとする科学論と大きく違った「科学を人間の営みとしてとらえる」科学観を提示して「第二世代」の科学論を形成したことは一般の了解がある。しかし、その後現在にいたるまで、さまざまな議論がなされてきたが、その間に新たな飛躍があり、「第三世代」が形成されているのだろうか。「アクター・ネットワーク理論」やフラーの「社会認識論」などは、SSK と大きくちがった地平を開いているのだろうか。もちろんこうしたことは程度問題の要素もあり、具体的な内実こそくした議論が必要であるが、問題の存在は自覚されている。コリンズとエバンスは「第三の波」という言葉を使用して、はっきりとこの問題を提起し、それにたいしてジャサノフらが反論する、といったこともなされている。またそれ以前から「自己言及」問題を軸として、SSK などの第二世代と第三世代を分ける議論や、記述的な（ものにとどまる）第二世代にたいする、「実践的」な第三世代、といった議論もある。

この問題は、一方では理論的な問題でもあるが、他方では科学について、とりわけ科学と社会について議論する言説についての実践的問題でもある。科学研究一般において、20 世紀末以降構造変化が生じ、研究様式が「モード 1」から「モード 2」に移行しつつあるとされるが、こうした一般的な議論は科学論や科学哲学とも関係している。すなわち、これまで基礎研究の中の基礎研究とされてきたこの分野も、「社会への貢献」といった要請

から無関係ではなくなっている。その意味でこれはまさに自己言及的問題、しかもその実践である。

こうした観点から科学論における「第三の波」の議論を検討すると、第三の波は、第二世代が主張した、科学における社会的要因の介在（従って、科学の「内的論理」で一義的に議論の決着がつくわけではないこと）を認め、それを継承する。この点では第二世代と連続的である。しかし、それを第二世代のように、単に科学についての記述にとどめるのではなく、科学技術をめぐる社会的意思決定についての実践的、あるいは規範的ないし政策提言の場面に拡張ないし適用しようとする。そして「科学で問うことはできるが、科学では答えられない問題」について、一般人参加型の様式を提言するといったジャサノフなどの議論がでてくることになる。

コリンズとエヴァンスはそうした議論に批判的であり、科学論の専門知には固有の役割があるはずだという。この問題は、一見抽象的なものに見えるが、現在実際に科学哲学、あるいは哲学一般でおこっている事態と関連している。合理主義の科学哲学者が社会構成主義に対して行った批判のなかで、かつての「発見の文脈」と「正当化の文脈」の区別を發展させ、社会構成主義者がというような事実があることを認めるとしても、そのことによって科学の正当性が否定され相対主義が帰結するわけでないのは、現代の社会においては、そうした社会的要因を消し去る社会制度が成立しているからだ、というかたちで専門知を擁護して、科学にたいする外部からの介入や方向づけに反対したことと関係する。問題は、このような知が、どのようにして成立するかについて、社会構成主義の議論がつみかさねてきた、主にミクロ場面での知見、とりわけ実験室のローカルな知が、どのようにして「普遍的な」転移可能な知となるかの過程の分析の意義を確認し、参加型議論と合理主義者の議論の中間の道をさぐる必要があるであろう。

現在の制度化された科学者集団の「専門知」を、そのまますべて正当なものとして自動的に認めるのではなく、近代科学的な実験知がなぜ信頼に足るものであるのかを、理論ないし言語を中心とした従来の議論とは違った形で明らかにし、それに基づいて「参加」ないし「介入」の必要な場面を示すことによって、参加型の無制限な拡大に歯止めをかける必要があるであろう。 ▽